

# 日本簿記学会ニュース

No. 59:7 / 2015

## 《部会の経過報告》

第31回関西部会は、平成27年6月27日(土)に福井県立大学(準備委員長:徳前元信氏)にて、開催されました。また、第31回関東部会は、平成27年7月11日(土)に東京国際大学(準備委員長:田宮治雄氏)を当番校として、TAP高田馬場にて、開催されました。詳しい内容は本誌部会記をご覧ください。

## 《全国大会のご案内》

第31回全国大会を下記の予定で開催いたします。

**厳しい暑さが予想されますので、軽装にてご参加頂きますよう、お願い申し上げます。**

会場:中央カレッジグループ

学校法人有坂中央学園 中央情報経理専門学校

(16:10～16:35)

報告②:津村怜花(高松大学)

「国立銀行の設立と『銀行簿記精法』

(16:40～17:05)

報告③:後藤小百合(高崎商科大学)

「官営富岡製糸場と会計制度の発達」

研究部会報告 17:15～18:15

司会:菊谷正人(法政大学)

報告①:簿記教育研究部会

部会長:工藤栄一郎(西南学院大学)

「簿記の学びの伝統と革新」

報告②:簿記実務研究部会

部会長:飛田努(福岡大学)

「中小企業における業種別工業簿記・原価計算実務に関する研究」

報告③:簿記理論研究部会

部会長:原俊雄(横浜国立大学)

「帳簿組織の研究」

懇親会 18:30～20:30

【2015年8月28日(金)】

学会賞審査委員会 13:00～15:00

理事会 15:30～18:00

【2015年8月29日(土)】

参加者受付 9:45～(本部館1階正面玄関)

高校簿記教育懇談会 10:00～11:30

(本部館6階大ホール)

司会:加瀬きよ子(東京都立江東商業高等学校)

講演:新田忠誓(一橋大学名誉教授)

『各種簿記検定試験の出題範囲の改定について』

会員総会 12:30～13:20(ホテルラシーネ新前橋)

学会賞受賞講演 13:20～13:40

映画上映・記念講演 13:50～15:30

司会:泉宏之(横浜国立大学)

映画上映:世界遺産・富岡製糸場ドキュメンタリー

映画『はじめの始まり～ブリクとシマン』

講演:松浦利隆氏(群馬県立女子大学)

『世界遺産の顕著で普遍的な価値—富岡製糸場と絹産業遺産群を例に—』

統一論題報告 15:40～17:10

論題『明治期殖産興業政策と洋式簿記の導入』

司会:原俊雄(横浜国立大学)

(15:40～16:05)

報告①:中野貴元(㈱エヌジェーケー)

「明治期殖産興業政策の時代と簿記教育」

【2015年8月30日(日)】

参加者受付 8:45～(本部館1階正面玄関)

自由論題報告 9:00～10:40

報告①:9:00～9:30 / 報告②:9:35～10:05

/ 報告③:10:10～10:40

統一論題討論 10:50～12:20(本部館6F大ホール)

座長:原俊雄

報告者:中野貴元, 津村怜花, 後藤小百合

詳しくは全国大会プログラムをご覧ください。

## 日本簿記学会第31回関西部会記

福井県立大学 徳前元信  
準備委員長

平成27年6月27日(土)、日本簿記学会第31回関西部会は福井県立大学にて開催された。統一論題のテーマは「新基準における純資産の部の変容—簿記教育・簿記理論の観点から考える—」である。

資本や純資産という用語は極めて簿記的であるとともに、金融ビッグバン以降の新会計基準の制定で、また経済のグローバル化のもとの会社法制定で、最も影響を受けたものの一つと思われる。それにより簿記の教育・研究・実務に戸惑いが生じたことも指摘されている。純資産の部の変容あるいは変質を、簿記理論の観点から今一度とらえなおすことで、将来の簿記教育・研究に活かしていく議論のきっかけとなれば幸いである。

藤井 秀樹氏(京都大学大学院)を座長に、まず解題を説明いただき、次の4氏の報告をいただいた。

藤井氏の解題では、①資本利益計算における資本の意味、②純資産包括利益計算の意味、③負債と持分の区分問題を論点として掲げている。特に①では、損益法でも資本が与えられなければ利益計算はできず、収益と費用は資本の存在を前提とし、資本は損益計算書を通す収支原因と通さない収支原因を識別する規準となっている。資本≠純資産という事態の発生によって、簿記理論や簿記教育が、どのような影響を受けるのかという問いを立てられた。

第1報告 岡崎英一氏(福井大学)

「純資産の部の構成について—純資産の部における株主資本区分以外の存在意義—」

岡崎氏は資産・負債アプローチの導入が、「資本の部」を変質させ、株主資本以外の項目の存在意義を与えたが、同時に資産・負債アプローチが貫徹されないことも示していると説明された。

第2報告 野口教子氏(高岡法科大学)

「純資産表示基準が与えた簿記教育への混乱—会計等式の意義—」

野口氏は簿記の本質と会計制度との間にある資本概念の相違が顕著化され、貸借対照表の構成要素間の関係を示す会計等式を算術式でとらえることは意味がなくなり、教育現場における混乱とともに、学習内容が原理・原則から事象の説明に強調点が移動

していると主張した。

第3報告 池田幸典氏(愛知大学)

「簿記理論・簿記教育からみた純資産会計の変容—IASBにおける動向を中心に—」

池田氏はIAS32等の持分の性質や範囲の変遷を分析し、持分が複雑化し、それが簿記原理・教育に与える影響を分析する。持分の範囲などは原則と例外を切り分けて説明し、原則に対する例外を限定的にしか認めない理論的姿勢を持ち続けることを主張する。それは教育上も必要なことであると唱える。

第4報告 岩崎勇氏(九州大学大学院)

「純資産概念の変容—連結基礎概念を手掛かりとして—」

岩崎氏は純資産の部の変容を連結基礎概念の変容を手掛かりに検討する。現在の会計基準は、ASBJの親会社説の考え方で、IASBの経済的単一体説の考え方の双方から強い影響を受けた混合モデルとなっており、連結会計基準と概念フレームワークとの不一致という問題が残され、教育上の困難も指摘する。

シンポジウムでは、フロアを交えて、積極的な質疑応答が繰り広げられ、理解が深められた。

また、福井県立大学でも教鞭をとられた中居文治氏(九州情報大学教授)から、「私の簿記・会計講義ノートからの断章」と題する記念講演をいただいた。

統一論題各報告者の会員には事前にフルペーパーを予稿集に提出いただき、質疑を盛り上げていただいた。加えて多方面から多大なご支援をいただいた。こちらも感謝申し上げる。

学会顧問の新田忠誓氏によれば、日本海側で当学会が開催されることは少なく、学会の広まりを感じていただいたようである。歴史と文化が感じられる福井の地で本部会を開催できたことは喜びであった。



統一論題写真 左より藤井秀樹氏、岡崎英一氏、野口教子氏、池田幸典氏、岩崎勇氏

## 日本簿記学会第31回関東部会記

東京国際大学 準備委員 鯖田豊則

日本簿記学会第31回関東部会（準備委員長 田宮治雄氏）は、平成27年7月11日（土）に、東京国際大学を当番校とし、TAP 高田馬場にて開催された。参加者は149名であった。

統一論題は、「収益認識の新たな局面」をテーマとして企業会計基準委員会収益認識専門委員会専門委員の佐々木隆志氏（一橋大学）のコーディネートおよび司会のもと、次の3氏の報告が行われた。

第1報告は、中村亮介氏（筑波大学）による「新たな収益認識基準とポイントプログラムの簿記処理」であった。近年、ポイントプログラムに注目が集まっており、発行額も年間1兆円にも上っている。簿記処理については、わが国では引当金方式が多く用いられているが、IFRS第15号では、売上分割方式が提言されている。報告では、わが国にはポイントを複数会社間で相互利用するケースや、初回売上に無関係な来店時ポイント付与のケースなど、IFRSが想定していないビジネスモデルが存在している事実を紹介し、このようなビジネスモデルに売上分割方式を採用すれば、取引実態をゆがめた財務諸表が作成されるおそれがあるとの指摘がされた。

第2報告は、石津寿恵氏（明治大学）による「非営利組織における補助金等の収益認識」であった。非営利組織が補助金を受け入れる際、用途につき制約・拘束が付されているものがあるが、JICPAの「非営利法人委員会研究報告第25号非営利組織の会計枠組み構築に向けて」に基づけば、このような補助金の受入時に「一時拘束資源の流入」として一旦収益認識し、減価償却などに基づき実質的に拘束が解除された際に「拘束の解除」として段階的に収益計上することになる。報告者は、使途制約が解除されたことに基づきその他の包括利益の構成要素的なものから純利益の構成要素的なものへと段階的にリサイクリングしているとも考えることもできると指摘している。また、負債概念の導入も検討の余地があるが今後の課題であるとしている。

第3報告は、山田康裕氏（立教大学）による「新たな収益認識基準の簿記的考察」であった。2014年に公表されたIFRS第15号「顧客との契約から生

じる収益」は、資産・負債の変動に基づくストックによる収益認識を前面に押し出した基準が計画されたが、結局顧客との契約から生じた資産・負債を公正価値で測定するという案（公正価値モデル）が断念され、当初取引価格で測定する案（顧客対価モデル）が採用されることとなった。しかしながら、顧客対価モデルでは、契約資産＝契約負債となることが当然であり、履行義務の充足は財または用役の提供と同じである。したがって、公正価値モデルを断念した段階で、これまでのフローによる収益認識と大差ないものとなったとの指摘がされた。

なお、記念講演をはさんで、佐々木隆志氏を座長に討論が行われ、3人の報告者とフロアとの間で活発な議論が繰り広げられた。

横山和夫氏による記念講演は、泉宏之氏（横浜国立大学）の司会のもとに行われ、フロア参加者一同、そのパワフルな講演に圧倒される内容であった。コンピュータの発達にもかかわらず手書を前提とする簿記教育が行われていること、実務と教育が乖離していることを指摘し、平成28年度からの日商簿記検定試験範囲の大幅な変更を踏まえ、簿記をとりまく環境の変化を見据えたタイムリーな講演であった。

具体的には、まず大学簿記・財務会計の入門教育にかかる仮定的前提として次の5項目が示された。

- ①実学として簿記・財務会計のあり方を明確にする。
- ②簿記論・財務諸表論の一元化を図る。
- ③入門教育を日商簿記検定3級と結び付けない。
- ④会計帳簿への記録手続および財務諸表の作成手続は最小限度とする。
- ⑤簿記・財務会計の学習教材として有価証券報告書の「経理の状況」を利用する。

その上で、市販の各種テキストの調査により、経営分析をとりあげているものが増えていること、入門書レベルでは記帳手続が略述されるなど、実務に即したものが増加傾向にあるとの指摘がされた。

また、学生向けに新たな入門教材を開発し、簿記学習にとどまらず、他社比較の簡単な経営分析をさせるなど、学生が簿記に興味をもつような仕掛けを取り入れていることも話された。この教材が幅広く行き渡れば、必ずや、学生の簿記離れに歯止めをかけることができるのではと感じられた。

## 教壇に立って「簿記人物語」を

横浜市立横浜粕谷和生  
総合高等学校

横浜商業高校（Y校）の旧校舎には、高さ30センチほどの立派な教壇が、どの教室にもあった。教師になりたての私は、この教壇に立つと、年の近い生徒に対して優越感にひたれた。

創立100周年を機に校舎は建て替えられ、それとともに教壇は消えた。しかし、それから30年以上経た今でも、毎日その場所に立っている。

さて、本年三月末に横浜市を定年退職した私は、四月より再任用教諭として、横浜市立横浜総合高校という午前・午後・夜の三部からなる定時制高校に勤務している。多様な生徒を受け入れる目的で設立された高校であるため、これまでとは勝手が違う。

たとえば、異動で新しく着任した教員のほぼ全員がクラス担任に就く。再任用教諭も例外ではない。現に私は一年二組の担任だ。また、毎日、昼に行われる全教職員約100人の打ち合わせでは、遠くに座っている人の顔は見えないし、発言の声が聞こえないこともしばしばある。四十年近く教員生活を送ってきた私にとっては、初めてのことばかりだ。

このような状況下におかれた私に対して周りは、「定年を過ぎた人間に、新しい学校でクラス担任は無理だろう」と見ていたようだ。私自身も、思う部分もあり、正直不安であった。

しかし、入学式当日、ワクワクした思いで生徒達を誘導し、思わず笑顔になっている自分に気づいた。その笑顔は式場にいた多くの人のためのカメラに収まってしまった。私もまだまだ行ける。雑用に近いクラス担任の仕事もこなしていけそうだ。

そしていよいよ授業が始まった。簿記の分かり易さには、ある程度の自信はあったが、果たしてこの学校でも通用するのか。その心配は、六月までの授業で、ほぼ消えた。出席率は毎回90%を超えている。定時制高校の出席率としては、驚異的な数字だそう。簿記離れは、この学校でも起きない。

多くのところで簿記離れの原因を、習得に要する地道な努力を今の若者はしないからとか、古臭い用語が多いからとか、いろいろ言われる。しかし、どんな生徒でも、授業が分かっているうちは、離れていくことはない。心掛けるは常にわかる授業だ。ならば分かる授業とは、どんな授業か？

ずばり「具体的に」である。高校生が体験したことのない企業を扱うのであるから、この視点は欠かせない。また、具体的に教えることに伴う学問的正

確性の後退は、高校教員の私にとって抵抗感はない。多少不正確でも、生徒がわしづかみでよいから具体的にイメージしてくれる方が大事だ。

一年生の2回目の授業で「勘定」を教える。会計学辞典で勘定については、「簿記上の記録・計算の単位」とあり、「勘定の内容を示す名称を勘定科目」とし、勘定口座については「勘定科目ごとに記録・計算する場所」とある。教科書も同じ記述だ。

一年生は、抽象的な勘定と具体的な勘定口座の違いはほとんど理解できない。両者の違いを理解することは、一年生にとって大した問題ではない。

そこで教壇に立って、「簿記人物語」を始める。「地球には地球人、火星にはタコのような火星人がいる」と黒板に略画を描く。そして「簿記の世界には、簿記人がいる。その姿かたちはこうだ」と赤いチョークでT字型を大きく描く。「簿記人は全員、名札をおでこに着けている。地球人を人間というのに対して、簿記人は勘定と呼ばれる。」

ここで生徒の頭の中は、勘定科目を付したT字型の勘定口座が勘定としてイメージされる。簿記人が勘定、T字型が勘定口座、名札が勘定科目に当てたつもりであるが、生徒は、勘定を勘定口座と区別することなく「T字型」の簿記人の姿として捉える。抽象的な勘定を具体的な勘定口座に置き換える。

さらに「簿記人物語」は続く。「簿記人は、自分の体重（金額）の増減を身体の右側と左側に記録する。資産グループと費用グループに属す簿記人は、体重（金額）が増えたときは、左側に増えた分を記録し、減ったときは右側に減った分を記録する。負債グループと資本グループ、収益グループに属す簿記人は、体重（金額）が増えたときは、右側に増えた分を記録し、減ったときは左側に減った分を記録する。」

そして、物語は財務諸表に至る。「一年の終わりになると資産グループに属す簿記人は、貸借対照表の左側に集合し、負債および資本グループに属す簿記人は貸借対照表の右側に集合する。収益グループに属す簿記人は・・・」と、まだまだ続く。

教壇に立って「簿記人物語」を語るときが、一番楽しい。できるだけ長く教壇に立っていたい。

発行所  
編集兼 日本簿記学会事務局  
発行人  
連絡事務局

〒101-0021 東京都千代田区外神田5-1-15  
株式会社白桃書房  
e-mail boki@hakutou.co.jp  
URL <http://www.hakutou.co.jp/boki/>